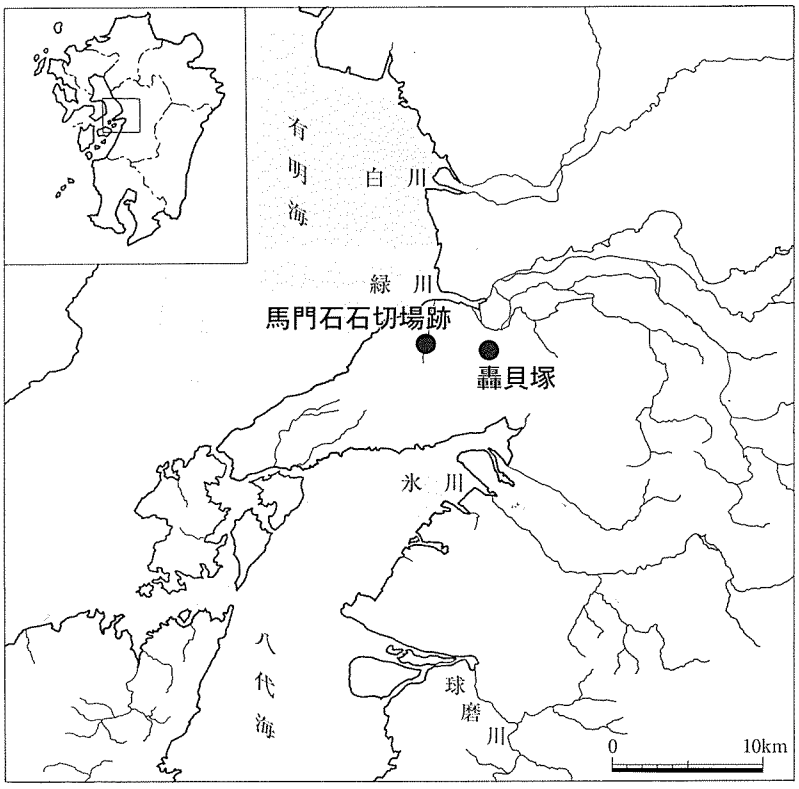
轟貝塚・馬門石石切場跡

—宇土市内遺跡範囲確認調査概報—

宇土市埋蔵文化財調査報告書　第27集



２００５年３月

熊本県宇土市教育委員会

巻頭写真１　馬門石石切場跡１・２次調査区空中写真（上が南）

巻頭写真２　馬門石石切場跡１次調査出土土師器

印刷仕様

版型：A4版
印刷：オフセット印刷
頁数：16頁（表紙共）
組版：写植横組み14級（10Ｐ）
　　２段組み、明朝体
製本：針金とじ（中とじ）
製版：スクリーン200線4色刷り
用紙：アート紙A4版86.5kg

序　　文

宇土半島基部周辺は、縄文時代から近世にかけて営まれた数多くの遺跡があります。特に縄文貝塚の宝庫として知られており、なかでも本市に所在する轟貝塚は「轟式土器」の標識遺跡として全国的に著名です。これまで行われた発掘調査で縄文時代の土器や貝製品、石器、漁具、骨角器など多種多様の遺物が出土しており、縄文人の生活を知るうえで貴重な資料になっています。

また、古墳時代以来の採石遺跡である馬門石石切場跡は、遠く関西地方にまで運ばれた馬門石製石棺の産地として近年注目を集めています。平成10年には継体大王陵・大阪府高槻市今城塚古墳から石棺の蓋の破片が採集され、翌々年の12年には推古天皇の初陵とされる奈良県橿原市植山古墳東石室からほぼ完全な形の石棺が出土しました。また、江戸時代には現存する日本最古の上水道・轟泉水道で大量に使用されています。まさに馬門石抜きにして宇土の歴史は語れないと言えますが、古墳時代から戦後まで石を加工する音が絶え間なく鳴り響いた石切場も、現在ではごく一部を除き、うっそうとした森林に姿を変えてしまいました。

宇土市では、これらの重要遺跡に対し、適切な保護策をとるための基礎調査として、平成13年度より宇土市内遺跡範囲確認調査事業を実施しています。本書はその概要をまとめた調査報告書です。本書に収録されておりますように、轟貝塚の範囲が想定していた以上に広がることや、馬門石石切場跡では古墳時代の土器が出土するなど当初の予想を上回る成果が得られております。

最後になりましたが、調査の実施にあたって絶大なる理解と協力を賜り調査を快諾していただきました地権者の皆様、また調査指導を賜りました各位、並びに文化庁・熊本県教育委員会に対し厚くお礼申し上げます。

平成17年３月

宇土市教育長　根　本　忠　昭

例　言

1．本書は国庫補助金を得て宇土市教育委員会が平成13～16年度にかけて実施した、宇土市内遺跡範囲確認調査事業に伴う轟貝塚ならびに馬門石石切場跡発掘調査の概要報告書である。
2．発掘調査地は轟貝塚が宇土市宮庄町108-1・120-1・123-1・2、馬門石石切場跡が宇土市網津町3482・3483・3484に所在する。
3．発掘調査は藤本貴仁（宇土市教育委員会文化振興課技師）が担当した。
4．本書に掲載した遺構実測図の作成は林和美・田中由美・森川美和子・藤本、遺構写真撮影は藤本が行い、空中写真撮影は㈱九州航空に委託した。
5．遺物実測図作成・同写真撮影は藤本が行った。
6．本書に掲載した遺構・遺物実測図の製図は、堀井香七（別府大学学生）・藤本が行った。
7．本書で用いたレベルは海抜標高であり、平面直角座標は旧日本測地系である。
8．本書に使用した遺構の略表記はＳＢ（掘立柱建物跡）・ＳＤ（溝）とし、柱穴に関してはＰの後に番号をつけた。
9．本書の執筆・編集は藤本が行った。
10．出土遺物・その他の関連記録は、宇土市教育委員会（宇土市新小路町95）に収蔵・保管している。

本文目次

第１章　轟貝塚……1
　第１節　はじめに……1
　第２節　調査の概要……3
第２章　馬門石石切場跡……6
　第１節　はじめに……6
　第２節　分布調査……7
　第３節　発掘調査……8
第３章　結語……11

挿図目次

図１　轟貝塚周辺遺跡分布図（1/25,000）……2
図２　調査トレンチ配置図（1/2,500）……3
図３　１～３Ｔ土層断面図（1/60）……4
図４　馬門石石切場跡周辺遺跡分布図（1/40,000）……7
図５　石切場跡と地質分布図（1/20,000）……7
図６　調査区位置図（1/2,000）……8
図７　１・２次調査遺構配置図（1/200）……9
図８　出土遺物実測図（1/3・1/5）……10

表 目 次

表１　轟貝塚調査一覧……1
表２　馬門石石切場跡出土遺物観察表……10

写真目次

巻頭写真１　馬門石石切場跡１・２次調査区空中写真（上が南）
巻頭写真２　馬門石石切場跡１次調査出土土師器
写真１　轟貝塚空中写真（南より）……1
写真２　１Ｔ検出の混土貝層（東より）……5
写真３　２Ｔ調査状況（東より）……5
写真４　２Ｔ検出の混土貝層（西より）……5
写真５　３Ｔ調査状況（東より）……5
写真６　２Ｔ出土の縄文土器……5
写真７　馬門地区空中写真（東より）……6
写真８　野添・藤ノ迫地区の石切遺構（南より）……8
写真９　１次調査前状況（東より）……8
写真10　石屑・ピット検出状況（東より）……9
写真11　ＳＢ01～03検出状況（北より）……9
写真12　土師器出土状況（西より）……10
写真13　須恵器出土状況（東より）……10

第１章　轟貝塚

第１節　はじめに

（１）調査にいたる経緯と経過

轟貝塚は縄文早期末から前期の轟式土器の標式遺跡として著名である（写真１）。古くから研究者の間で注目された貝塚であり、1919（大正８）年の浜田耕作、清野謙次ら京都大学の調査、その翌年に長谷部言人ら東北大学による調査が行われている（表１）。また、1958（昭和33）年の小林久雄、松本雅明、富樫卯三郎を主体とした宇土市、宇土高校などの調査や1966（昭和41）年の江坂輝弥を団長とする慶応大学の調査が実施されている。

これらの調査によって縄文時代から中世にかけての土器・陶磁器、人骨、貝製品、石器、漁具、骨角器など多種多様な遺物が出土した。出土した遺物はそれぞれの調査機関で保管されているが、慶応大学資料については調査図面・日誌などの複写物とともに2001（平成13）年に宇土市に移管され、現在、報告書刊行に向けて整理作業を継続中である（池田2002）。

轟貝塚は1958（昭和33）年３月14日、市史跡に指定され、保護されるべき遺跡として位置づけられている。その一方で、宇土市は隣接する熊本市のベッドタウンとして市街地を中心に宅地造成が行われ人口が増加傾向にあり、轟貝塚が立地する宮庄町周辺においても例外ではなく、古くからの集落を核として新興住宅地が広がっている。

このような状況を受けて、宇土市では貝塚の範囲や内容把握を早急に行う必要があると判断し、15年度に貝塚中心部周辺の測量調査、16年度に貝塚の範囲確認のためトレンチ調査を実施した。

（２）位置と環境

波穏やかな有明海に面する宇土半島基部周辺は、九州を代表する貝塚密集地帯である。宇土市の轟貝塚・曽畑貝塚・西岡台貝塚、宇城市（旧松橋町）の大野貝塚、下益城郡城南町の阿高貝塚・黒橋貝塚・御領貝塚などがあり、在野の研究者である小林久雄氏をはじめとして、古くから多くの研究者の関心を集めてきた。

写真１　轟貝塚空中写真（南より）

表１　轟貝塚調査一覧（平山・髙木1977を改変）

次数	調査年	調査者	調査主体	人　骨	遺　　物	文献
1	1917	鈴木文太郎、山崎春雄ほか	京都大学、熊本医専	３体		①②
2	1919	浜田耕作、榊原政職、清野謙次	京都大学、熊本県史蹟調査会	18体	石鏃、石匙、磨製石斧、打製石斧、石錐、磨石、砥石、三角形石器、牙製垂飾品	③④
3	1920	長谷部言人	東北大学	20体	白色大理石製玦状耳飾	
4	1930	鳥井竜蔵、小林久雄				⑥
5	1958	小林久雄、松本雅明、富樫卯三郎	宇土市、宇土高校	小児甕棺１	石鏃、石匙、スクレイパー、石錐、磨製石斧	⑦
6	1966	江坂輝弥ほか	慶応大学、熊本日日新聞社	７体	笄、滑石製垂玉、石鏃、石匙、磨石、貝輪ほか	⑧⑨

① 鈴木文太郎　1918「河内国府人骨・肥後轟貝塚にて発掘せる人骨について報じ併せて石器時代の住民に及ぶ」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第２冊
② 鈴木文太郎　1918「肥後轟貝塚河内道明寺等にて発掘せる人骨に就いて」『人類学雑誌』第33巻第３号
③ 浜田耕作・榊原政職　1920「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第５冊
④ 清野謙次　1920「肥後国宇土郡轟村宮荘貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第５冊
⑤ 三森定男　1935「肥後轟貝塚の土器に就いて－覚書－」『考古学』第６巻第２・５号
⑥ 小林久雄　1935「肥後縄文土器編年の概要」『考古学評論』第１巻第２号
⑦ 松本雅明・富樫卯三郎　1961「轟式土器の編年－熊本県宇土市轟貝塚調査報告」『考古学雑誌』第47巻第３号
⑧ 江坂輝弥　1971「熊本県宇土市轟貝塚」『日本考古学年報』第19号
⑨ 渡辺　誠　1973「縄文人の習俗－装身具をつけた人骨」『古代史発掘』第２巻

轟貝塚は、宇土半島の山塊より東側に向けて舌状に派生した丘陵先端部から沖積地にかけての標高４～７ｍに位置している（図１）。東西約100ｍ、南北約150ｍにわたって貝殻の散布がみられる大貝塚である。基盤となる地質は安山岩類や凝灰角礫岩類などからなる大岳火山岩類で、宇土半島の主峰・大岳（標高477.6ｍ）を中心とし、ほぼ半島の全体に放射状に広がる。貝塚周辺は大岳系山地東麓に所在する轟水源などの湧水に恵まれるとともに、有明海を北に臨む良好な立地条件によって、縄文時代から歴史時代までの多くの遺跡が残されている。轟貝塚も縄文時代だけでなく、弥生時代から中世までの遺物が出土している複合遺跡である。

轟貝塚周辺の縄文貝塚・遺跡として、西岡台貝塚や馬場遺跡がある。轟貝塚の東約60ｍの至近距離にある西岡台貝塚は、通称・西岡台と呼称される標高約40ｍの独立丘陵西側斜面から裾部に位置している。貝層は２つに分離され、下層が轟・曽畑式土器などの前期の土器を主体とし中期の土器も含み、上層は出水式や北久根山式などの後期前半の土器を主体とする。昭和58・59（1983・1984）年に実施された発掘調査でドングリなどの堅果類の貯蔵穴が５基検出された。（木下・高木ほか1985）。馬場遺跡では曽畑式土器が出土している。

続く弥生・古墳時代には甕棺が出土した北平遺跡や城山遺跡、巨大な首長居館が造営された西岡台遺跡がある。本首長居館と対応するように、熊本県最古の前方後円墳である舶載三角縁神獣鏡が出土した城ノ越古墳をはじめとする前期の前方後円墳が相次いで築造された。

古代では西岡台遺跡で土馬や土器が出土しており、中世には宇土氏・名和氏が居城した宇土城跡（西岡台）が築城された。主郭（千畳敷）やⅡ郭にあたる三城の発掘調査で、掘立柱建物跡や横堀跡、門跡などが検出され、大量の土師質土器や瓦質土器、青磁・白磁・染付などの貿易陶磁器が出土した（平山・高

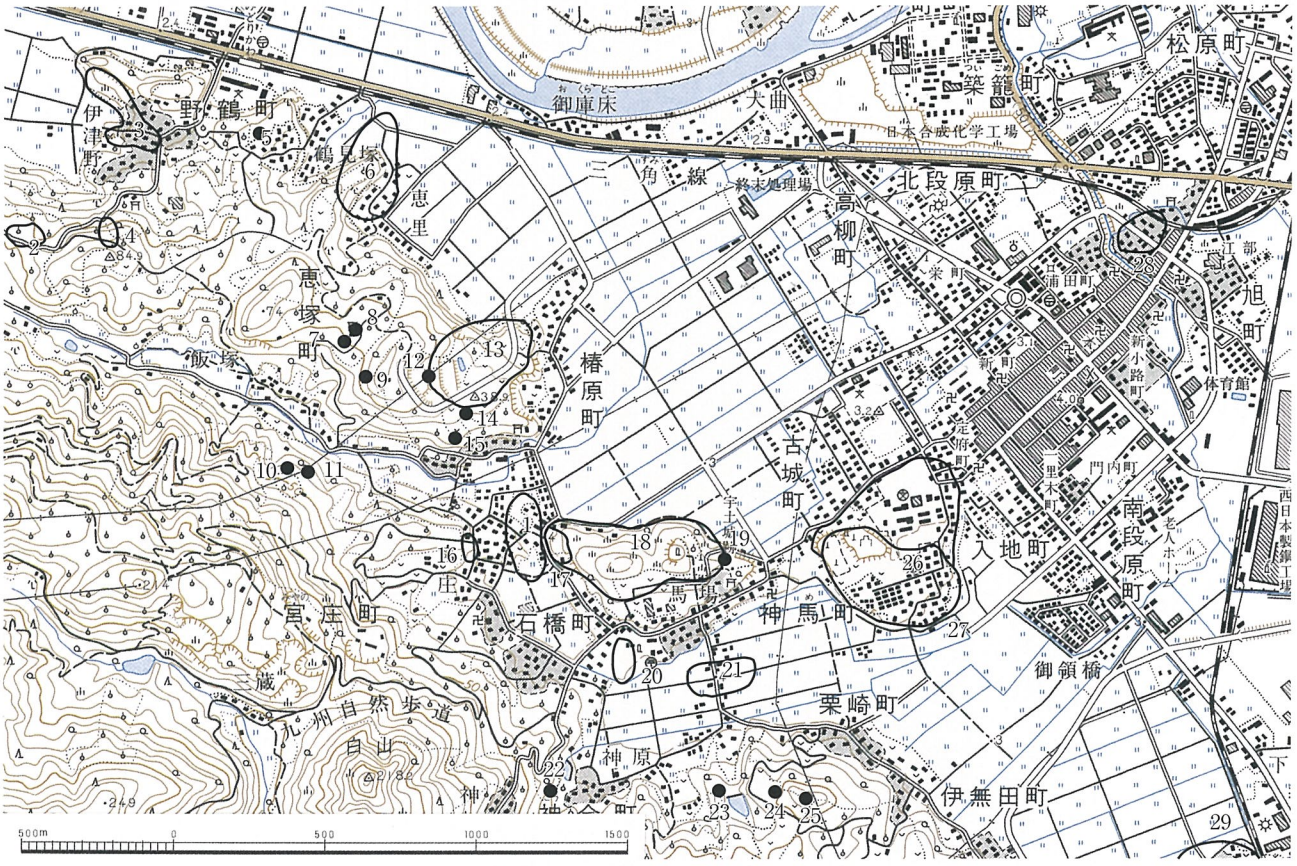


図１　轟貝塚周辺遺跡分布図（1/25,000）

1 轟貝塚　2 伊津野遺跡　3 野鶴貝塚　4 神ノ木山古墳群　5 天神山古墳　6 恵里遺跡　7 東畑２号墳　8 東畑古墳　9 金嶽山古墳　10 仮又古墳　11 仮又２号墳　12 椿原古墳　13 椿原遺跡　14 椿原貝塚　15 椿原石蓋土壙墓　16 北平遺跡　17 西岡台貝塚　18 宇土城跡西岡台（西岡台遺跡）　19 西岡台箱式石棺　20 陳ノ前遺跡　21 馬場遺跡　22 山王平古墳　23 神合古墳　24 猫ノ城古墳　25 城ノ越古墳　26 城山遺跡　27 宇土城跡城山　28 石ノ瀬遺跡

木ほか1977）。轟貝塚（遺跡）や陳ノ前遺跡でも中世の土器・陶磁器が出土している。

第２節　調査の概要

（１）はじめに

調査初年度の平成15年度は、５・６次調査が行われた貝塚中心部から東・南側にかけての測量を実施した。翌16年度には貝塚の範囲を確認するため、これまでの調査成果や貝殻の散布状況、地形などを検討して計３ヶ所でトレンチ調査を実施した（図２）。

１Ｔは貝塚北側の畑地で２×４ｍ、２Ｔは貝塚東側の畑地で1.5×４ｍ、３Ｔは貝塚南側の畑地で２×４ｍの調査トレンチを設定した。１Ｔは宮庄町108－１、２Ｔは同120－１、３Ｔは同123－1･2に所在する。平成16年10月４日に調査を開始し、一時的な中断を経て同11月29日に現地における調査を終了した。

（２）トレンチ各説（図３・写真２～５）

１　Ｔ　土層堆積は３層に大別でき、上層が１層から５層、中層が６層から９層、下層が10層である。上層の１・２層は現代の盛土であり、３層は旧水田層である。４層は３層の水田形成前に土地を水平にするための造成土とみられ、５層からは近世陶磁器が出土している。中層の６・７層は縄文時代から古墳時代の土器を包含する層であり、８・９層はほとんど遺物を含まない。下層の10層はハイガイを主とする混土貝層であり、縄文土器を包含する層である。旧水田層の３層下層から10層の混土貝層上面までは、約1.6ｍの高低差がある。５層以下では湧水がみられた。

２　Ｔ　本トレンチも同様に３層に大別でき、上層の１層から６層までは縄文土器や中世の土器・陶磁器を包含する層で、中世以降に形成されたものである。中層の７層から９層は古墳時代の土師器や須恵器の包含層である。下層の10層から12層は基本的に縄文土器のみを包含する層であり、11層は混土貝層、12層は暗オリーブ褐色砂礫層である。13層は基盤層とみられるオリーブ灰色粘土層である。

３　Ｔ　本トレンチは１層から８層に分けられる。１層から８層まで縄文土器、土師質土器、瓦質土器、青磁などが混在しており、８層は基盤層の安山岩風化土とみられる地山である。貝層や混土貝層は

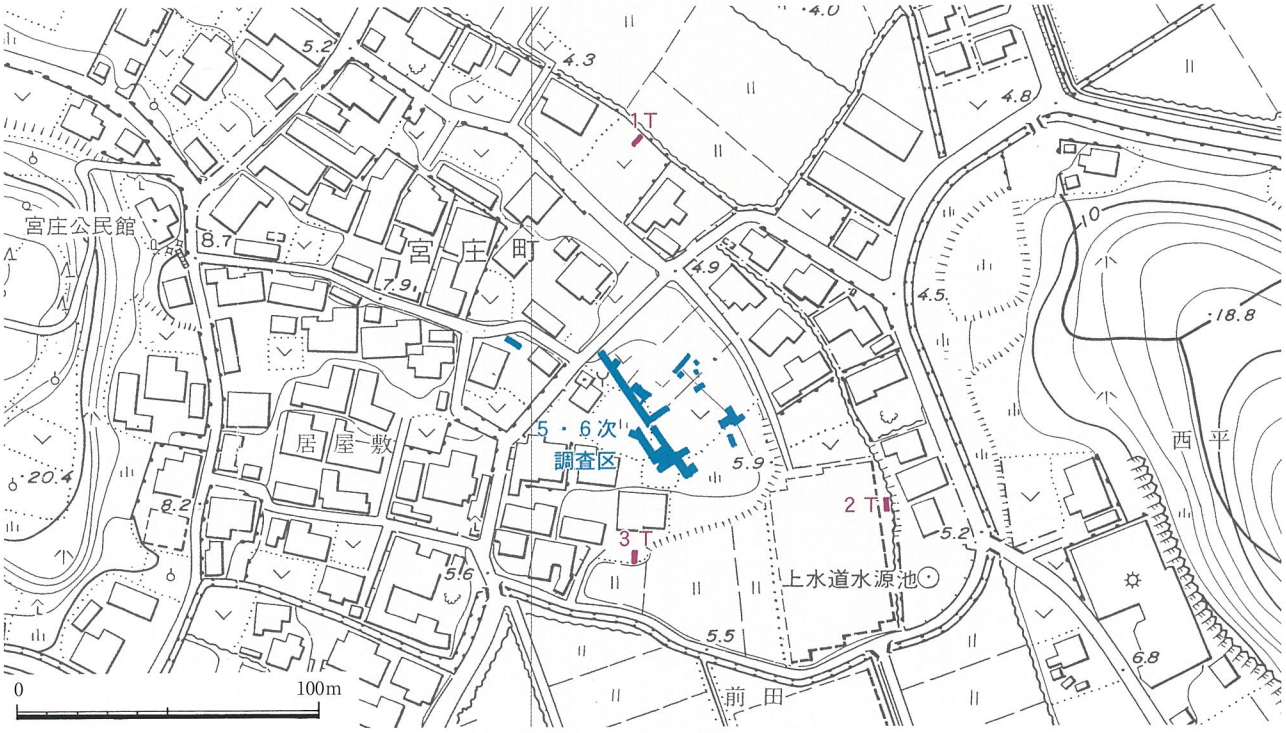
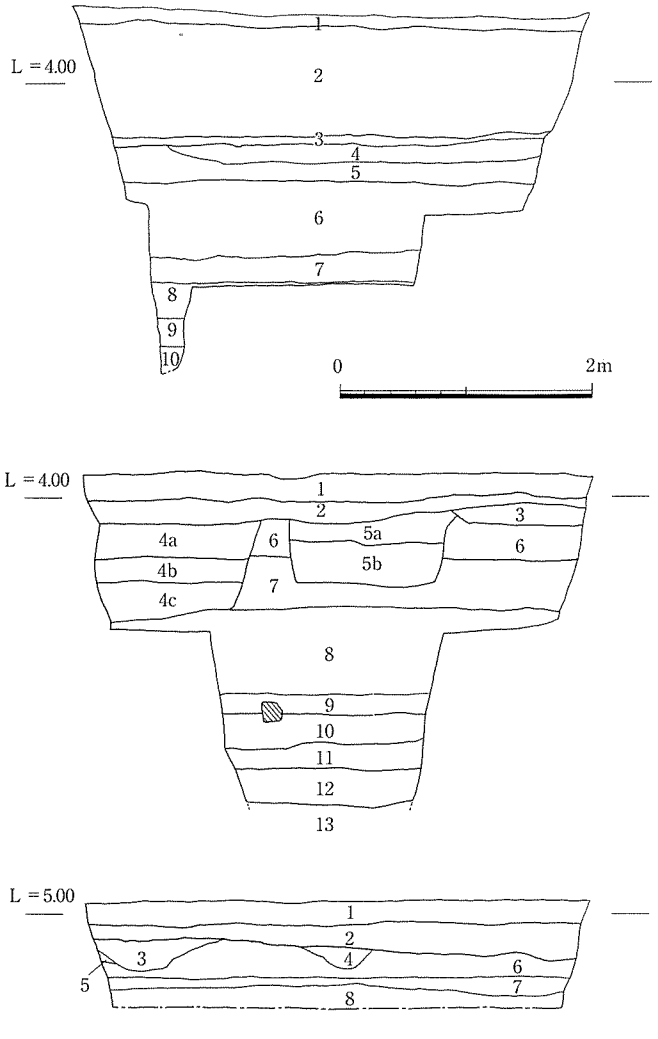


図2　調査トレンチ配置図（1/25,000）



1Ｔ西壁土層断面

1　灰黄褐色土（10ＹＲ4/2）
2　暗褐色土（7.5YR3/3）
3　暗灰黄色土（2.5YR4/2）
4　黒褐色土（2.5YR3/1）
5　黄灰色土（2.5ＹＲ4/1）
6　暗灰色土（N3/）
7　オリーブ黒色土（5Ｙ3/2）
8　暗オリーブ灰色土（2.5ＧＹ4/1）
9　暗緑灰色土（7.5ＧＹ3/1）
10　暗緑灰色土（10ＧＹ4/1）

2Ｔ東壁土層断面

1　暗褐色土（10YR3/2）
2　褐灰色土（10YR4/1）
3　黒褐色土（7.5YR3/1）
4a　黒褐色土（2.5YR3/2）
4b　黒褐色土（2.5YR3/1）
4c　黒褐色土（2.5YR3/1）
5a　黒色土（7.5YR2/1）
5b　黒色土（7.5YR2/1）
6　褐灰色土（10YR4/1）
7　黒褐色土（10YR3/1）
8　黒褐色土（10YR2/2）
9　黒褐色土（7.5YR2/2）
10　灰色土（5Y4/1）
11　オリーブ黒（7.5Ｙ3/1）
12　暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）
13　オリーブ灰色土（2.5ＧＹ/1）

3Ｔ西壁土層断面

1　黒褐色土（10YR2/2）
2　黒褐色土（10YR3/2）
3　黒色土（2.5YR2/1）
4　黒褐色土（10YR3/1）
5　黒色土（10YR2/1）
6　暗褐色土（10YR3/3）
7　黒色土（5Y2/1）
8　灰色土（5Ｙ6/1）

図３　１～３Ｔ土層断面図（1/60）

確認できなかった。現地表面から地山面までは約0.7ｍと浅く、後世に削平された可能性が高い。

（３）出土遺物

土　器　縄文土器として、轟Ｂ式・曽畑式・阿高式・南福寺式・鐘ヶ崎式・北久根山式土器などの縄文時代前期から後期までの土器が出土した（写真６）。縄文土器以外では弥生土器、古墳時代の土師器や須恵器、中世の土師器や瓦質土器、青磁が出土した。

自然遺物　ハイガイやマガキ、ハマグリ、ナガニシなどの鹹水産の貝類遺骸が多く、淡水産の貝類はほとんど出土していない。魚類や哺乳類、植物遺存体は同定しておらず詳細は本報告に委ねたいが、サメの背骨、モモの種子などがある。

そ の 他　磨石や敲石、木製椀底部や刻みを多数つけた物差し状の木製品、杭先、人骨（下顎骨など）が出土した。

【引用・参考文献】

平山修一・髙木恭二ほか　1977『宇土城跡（西岡台）』本文編　宇土市埋蔵文化財調査報告書第１集
平山修一・髙木恭二　1977「轟貝塚（西岡台地区）の調査」同上
木下洋介・髙木恭二ほか　1985『西岡台貝塚』宇土市埋蔵文化財調査報告書第12集
池田朋生　2002「轟貝塚」『新宇土市史』資料編第2巻　宇土市
古森政次・金田一精　2003「縄文時代」『新宇土市史』通史編第1巻　宇土市

写真２　１Ｔ検出の混土貝層（東より）

写真３　２Ｔ調査状況（東より）

写真４　２Ｔ検出の混土貝層（西より）

写真５　３Ｔ調査状況（東より）

写真６　2Ｔ出土の縄文土器

第２章　馬門石石切場跡

第１節　はじめに

（１）調査にいたる経緯と経過

馬門石[1]の利用の歴史は古く、５世紀前半頃に築造された熊本県上天草市（旧大矢野町）長砂連（ながされ）古墳の横穴式石室の石障を嚆矢とし、宇土半島周辺の横穴式石室や畿内・中国地方の有力豪族の石棺として多用された。中世は五輪塔や宝筐印塔などの石塔、近世以降になると大量消費が始まり、上水道の樋管・桝・井戸枠、水盤、鳥居、眼鏡橋、石畳、祠、玉垣など多種多様な製品が生産された。馬門石のなかでも阿蘇ピンク石に関しては赤石場見締が配置され「御用石」として肥後細川藩によって公的に管理された（高木1997）。

一方、生産地である馬門石石切場跡に目を向けると、近世・近代以降については文献資料がごくわずかに残されているが、石切場の変遷や石工集団の組織の実態についてはほとんどわかっていない。戦後、コンクリートブロックの急速な普及によって昭和30年代以降は生産がほぼ断絶し、現在ではかつての石切場の大部分が山林となっている。だが、幸いなことに機械化が行われる以前に採掘が停止されたため、石切遺構は比較的良好な状態で保存されていることが数度にわたる踏査で判明した。

近年、馬門石のなかでも阿蘇ピンク石が有する歴史的価値が再評価され、産品化への期待が高まりつつある。このような実情を踏まえたうえで、宇土市では早急に石切場の範囲や内容把握を行う必要があると判断し、平成13年度より範囲確認調査を実施している。13年度は石切場の分布調査、14・15年度は１・２次発掘調査と石切遺構の実測、16年度も引き続き３次発掘調査を実施した[2]。

（２）位置と環境

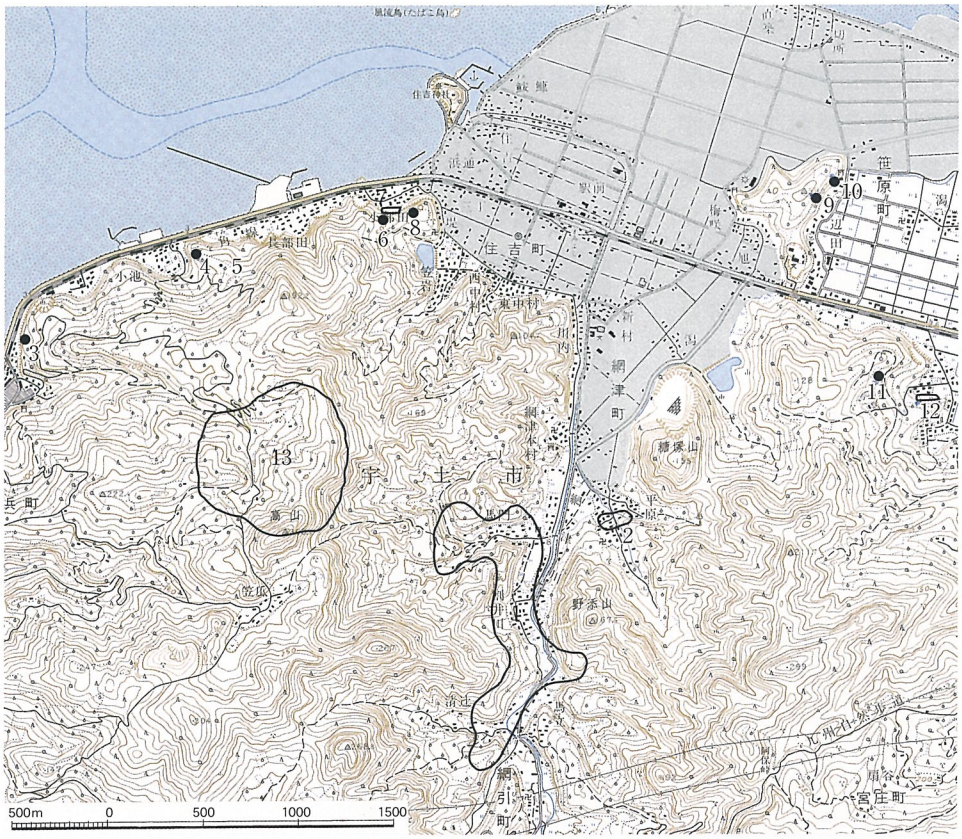
馬門石石切場跡は大岳（標高477.6m）を主峰とする宇土半島の山塊から派生した丘陵地に所在する（図４、写真７）。宇土市網引町白岩を水源とし、北流して有明海にそそぐ網津川中・下流域の東西約１km、南北約1.5kmにわたって石切場が広がっている。代表的産出地は宇土市網津町字馬門であり、馬門石という名称は当該地区の字名に由来する。

石切場跡の周辺には縄文時代から近世にかけての遺跡が点在する。平原貝塚は貝の散布が認められるが、調査が行われていないため詳細不明である。古墳時代後期になると、有明海に面する小丘陵や丘陵斜面などの眺望に優れた場所に横穴式石室を主体部とする円墳や箱式石棺、横穴墓が築造された。

御殿山古墳の主体部は、窓枠状に加工した阿蘇灰黒色石の刳抜玄門を有する横穴式石室である。梅崎古墳は横穴式石室の側壁に３～４隻の船団が描かれた装飾古墳として知られており、発掘調査で阿蘇ピンク石製の破片が出土している。城塚古墳も阿蘇ピンク石の刳抜玄門を有する横穴式石室を主体部とする。これらの円墳に近接して小部田横穴墓群や尾ノ上横穴群などの横穴墓群や、小部田箱式石棺や梅崎箱式石棺群が分布する。

古代・中世の遺跡については明確ではないが、近世になると、肥後本藩の庇護により宇土牧山跡で馬の飼育がなされた。馬門の西側後背地に広がる牧山跡には、土塁や堀が数kmにわたって残る。その牧山の守護神として西の宮大明神を祭神とした牧神社が今も残っており、文化四年銘の鳥居がある。なお、古代宇土郡四郷のひとつである大宅郷には、８世紀初頭から官営の牧山が設置され、中世にも千町牧と称して牧馬の飼育がなされたという。

写真７　馬門地区空中写真（東より）



1　馬門石石切場跡
2　平原貝塚
3　長浜箱式石棺群
4　小池平１号墳
5　小池平２号墳
6　小部田箱式石棺
7　小部田横穴墓群
8　御殿山古墳
9　梅崎古墳
10　梅崎箱式石棺群
11　城塚古墳
12　尾上横穴墓群
13　宇土牧山跡

※網掛部分は近世以降に陸化

図４　馬門石石切場跡周辺遺跡分布図（1/40,000）

第２節　分布調査

（１）石切場周辺の地質について

網津川流域の地質は輝石安山岩や凝灰角礫岩からなる安山岩類を基盤層とする。この岩盤に約９万年前の阿蘇山の大爆発によって形成されたAso-４火砕流堆積物と呼ばれる阿蘇溶結凝灰岩（阿蘇石）の堆積層がのり、さらにこの上を未固結堆積物が覆っている。阿蘇石とは阿蘇火砕流堆積物の溶結した部分を示す岩石の通称であり、含有鉱物は斜長石、斜方輝石、角閃石などである。分布は九州中北部を中心とし、遠くは山口県宇部市周辺など周防灘を越えて中国地方の一部まで達している。

石切場跡における阿蘇石の色調は、菊池川流域や氷川流域などと同様に灰黒色を基本とするが、堆積する過程でいくつかの特殊要因が重なったためか、ピンク色、ベージュ色、黄色など凝灰岩としては特異な色調のものが存在している。

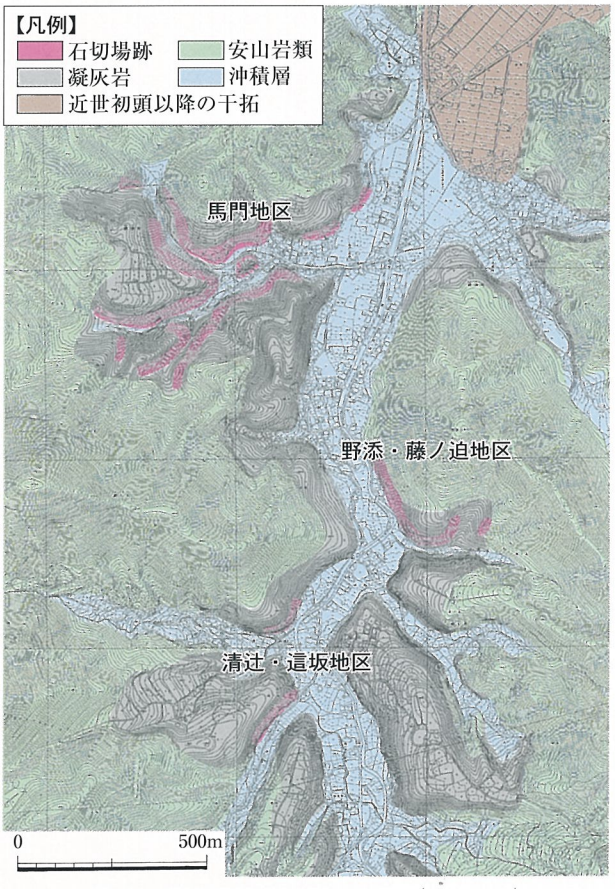


図５　石切場跡と地質分布図（1/20,000）

（２）石切遺構の分布と特徴

石切場跡は馬門地区（宇土市網津町）、野添・藤ノ

迫地区（同）、清辻・這坂地区（宇土市網引町）の３地区に大別される（図５）。石切遺構の大半は眼下に谷を望む丘陵斜面や尾根筋で確認されているが、これはおそらく石材の運搬に規制された結果と判断できる（藤本2004）。

本石切場跡で確認された石切遺構の大半は矢穴痕であり、近世初頭以降の所産とみられる（写真８）。また、ごく一部に筋状に堀り込まれた痕跡が確認されているが時期については不明である。

矢穴技法が確立する以前の採石方法とされる、母岩から目的とする大きさの石材周囲を掘って採取する掘割技法は今のところ未確認である。ただし、宇土半島基部には馬門石製とみられる阿蘇灰黒色石製中世石塔が多数残されており、石材としての利用が行われていたことは疑いない。中世遺構は後世の採掘によって失われたか、採掘によって生じた石屑の下に埋没している可能性が高い。露頭から直接石材を採取する以外にも、露頭周辺に転がっている適当な大きさの石に手を加えて製品化されたものもあったと考えられる。

第３節　発掘調査

（１）調査地点の概要

調査地点は馬門地区における石切場跡のほぼ中央、赤石神社が鎮座する独立丘（標高約29m）とその北側の丸塚山（同約90m）に挟まれた谷部（同約14m）である（図６、写真9）。本独立丘付近は古墳時代の石切場跡と想定されており（髙木1997）、丸塚山南側斜面は馬門地区を代表するピンク石の石切丁

写真８　野添・藤ノ迫地区の石切遺構（南より）

写真９　１次調査前状況（東より）

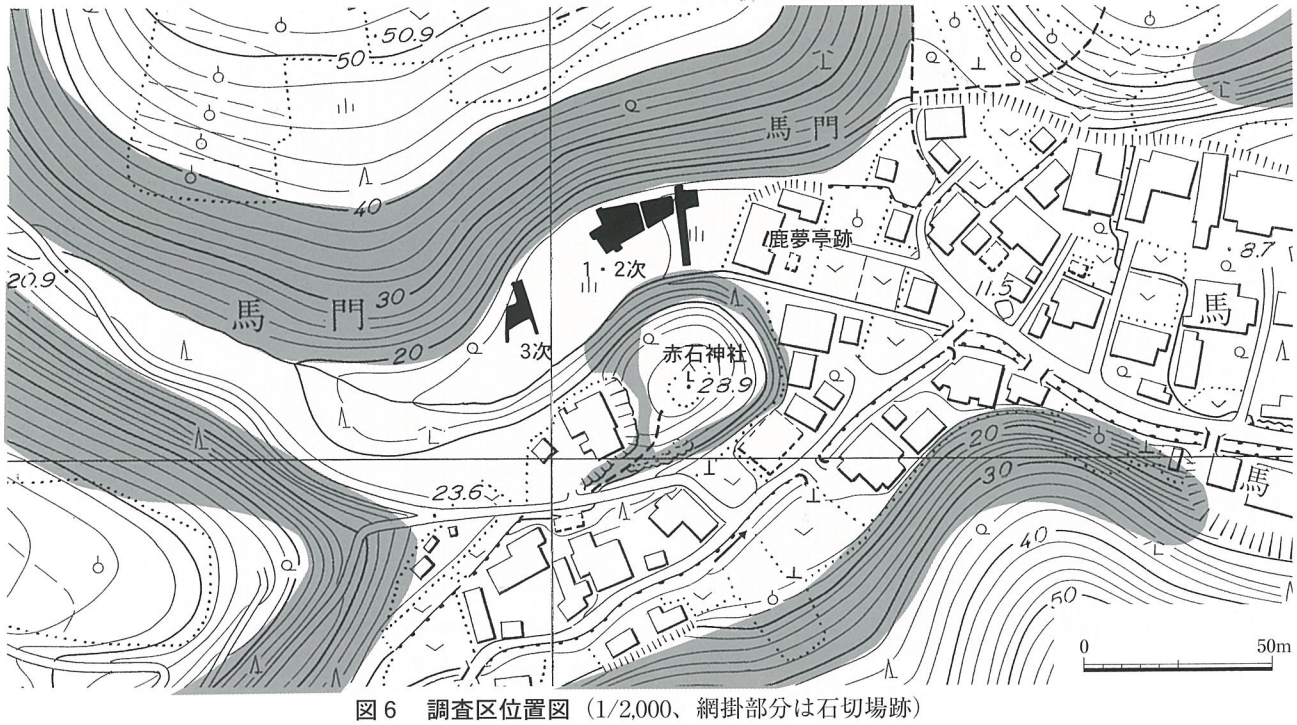


図６　調査区位置図（1/2,000、網掛部分は石切場跡）

場である。近世以降、石屑崩壊を防いで作業場や運搬路を確保するために設けられたとみられる高さ約２m前後のピンク石の石垣が数段にわたって構築されている。

調査区の約30m東には天明年間（1781～1788年）、宇土細川藩６代藩主細川興文が狩りの際に立ち寄った鹿夢亭（ろくむてい）跡があり、敷地境の小川にピンク石製の単一アーチ式の眼鏡橋が架かっている。

（２）検出遺構（図７、巻頭写真１）

ピット群　直径約10～20cmと小さく、臨時のテント小屋程度の簡易な建物が建てられていた可能性が高い（写真10）。Ｐ４より古墳時代とみられる土師器細片が出土した。このピットに伴い拳大から人頭大程度のピンク石がほぼ同一レベルで出土したが、多くは平坦な面を上に向けており人為的なものである可能性が高い。時期は検出層位から古墳時代終末期から中世以前である。

掘立柱建物跡　検出した３棟とも南北主軸で東西に平行して建てられており、うち西側の建物はＳＢ01→ＳＢ02の順で建替えられている（写真11）。配置状況からＳＢ01やＳＢ02とＳＢ03は、ある時期に並存していたとみられる。

柱穴は長辺約80～90cm、短辺約50～60cmの隅丸長方形を呈する比較的大型のものであり、柱は柱痕跡から推定して直径約20cm前後である。かなりしっかりした建物が立地しており、先のピット群のあり方とは大きく異なる。

遺構保護を目的として大半を表面検出で止めているため時期は確定的ではないが、検出層位や出土遺物、土石流跡との重複関係より中世から近世前半期の建物跡と判断できる。石切丁場内に立地していることから単なる住居ではなく、石切場に関連する建物であろう。

（３）出土遺物

写真10　石屑・ピット検出状況（東より）

写真11　SB01～03検出状況（北より）

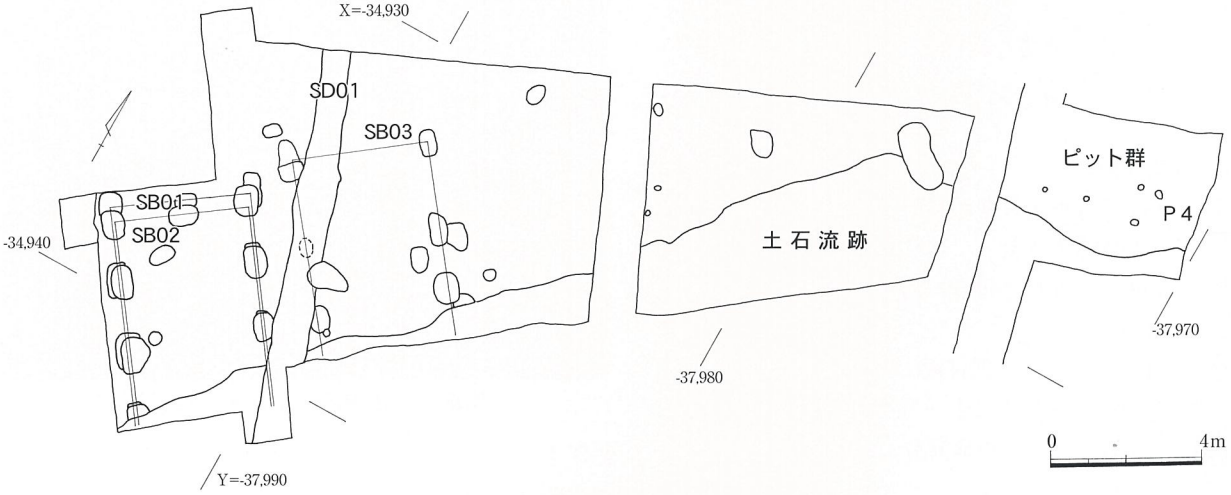


図７　１・２次調査遺構配置図（1/200）

表２　馬門石石切場跡出土遺物観察表

No.	種類	色　調	焼成	胎　土	調整及び特徴	法量（cm）※
1	土師・甕	内:暗灰黄色，外:明褐色	良好	砂・ウンモ含む	内：ヘラケズリ→ナデ，外：タテハケ→ヨコハケ	口径(17.2),胴部最大径(22.8),高27.0
2	土師・甕	内･外：淡赤褐色	良好	砂・ウンモ含む	内・外：ナデ	口径(16.3)
3	須恵・蓋坏	内･外：淡灰色	やや不良	角閃石含む	内・外：回転ナデ	口径(10.8),立上がり1.0
4	須恵・蓋坏	内･外：淡灰色	やや不良	砂・角閃石含む	内：ナデ，外：回転ヘラケズリ・ナデ	口径(11.8),高(3.4),立上がり1.1

※復元値は（　）で示す

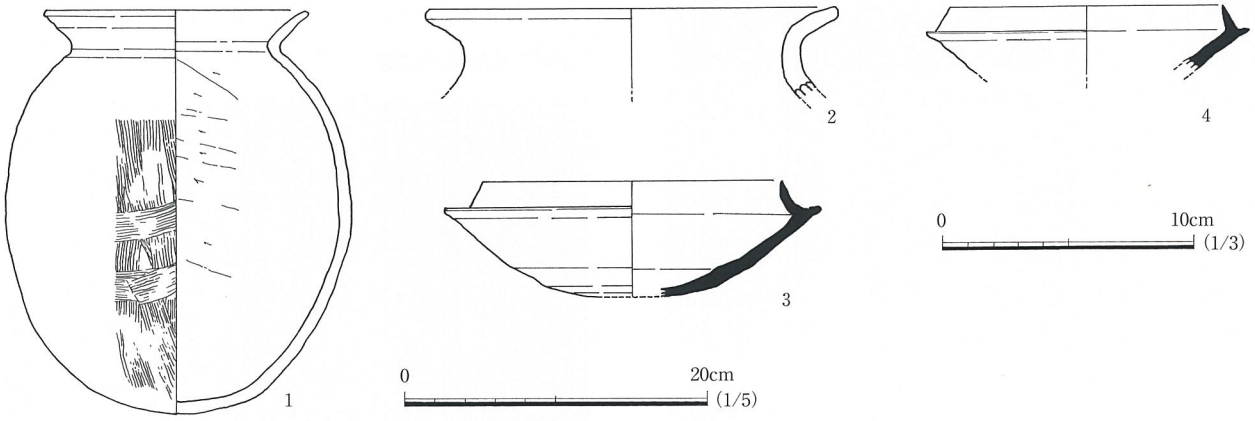


図８　出土遺物実測図（１のみ1/5、その他は1/3）

出土遺物は古墳時代中・後期の土師器と須恵器、中世の土師質土器、瓦質土器、青磁、肥前系などの近世国産陶磁器などである（図８、表２、巻頭写真２、写真12・13）。未製品と断定できる石材は出土していないが、出土した石屑に人為的な打圧によって割れた痕跡が確認できるものがある。

写真12　土師器出土状況（西より）

写真13　須恵器出土状況（東より）

註

１）「馬門石」の定義は厳密には定まっていないが、本稿でいう馬門石とは馬門周辺で採掘される様々な色調の阿蘇石全てを含むものとしたい。石材の色による区別は高木1995を準用し、「阿蘇ピンク石」や「阿蘇灰黒色石」などと呼び分ける。

２）３次発掘調査については、平成17年２月現在調査中であるため、具体的な内容については17年度刊行予定の本報告書で取り上げたい。

【引用・参考文献】

高木恭二　1995「石棺式石室と肥後」『古代の出雲を考える』８　出雲考古学会

高木恭二　1997「阿蘇石の利用」『史叢』創刊号　熊本歴史学研究会

藤本貴仁　2004「宇土半島馬門付近における石切場の調査」『大王のひつぎ海を渡る』－宇土馬門石製家形石棺の謎－　九州前方後円墳研究会・石棺文化研究会

第３章　結　　語

平成13年度より実施している市内遺跡範囲確認調査に伴う轟貝塚と馬門石石切場跡の調査によって、多くの知見を得ることができた。

轟貝塚については、貝塚の範囲確認を目的とした３つのトレンチのうち、２つのトレンチで縄文土器を包含する混土貝層を確認した。出土した縄文土器は阿高式系土器や磨消縄文系土器などの縄文中・後期の土器が主体を占めた。また、混土貝層のサンプリングで得られた貝種は鹹水産のハイガイが主体を占め、縄文時代以降の包含層にも同様にハイガイやハマグリ、マガキなどの鹹水産の貝類が目立った。

轟貝塚の形成に言及した池田朋生氏によれば、純貝層は縄文時代中期から後期前葉の阿高式系土器段階と後期の北久根山式段階に形成されたと指摘している（池田2002）。今回の調査結果はこれを傍証するものではないかと考えられる。

また、氏は轟貝塚を中・後期の貝塚として捉え、環玄界灘漁労文化圏の一連の資料として、近隣のほぼ同時期に形成された阿高貝塚や黒橋貝塚と対比して考察していく必要があると指摘している。今後は慶応大学調査資料や隣接する西岡台貝塚出土資料の分析を進めるとともに、有明海沿岸部に分布する貝塚との比較検討を通じて轟貝塚の位置づけをよりいっそう明確にしていく必要がある。

馬門石石切場跡は高木恭二氏による一連の石棺研究に関連し、その重要性が近年指摘されてきた採石遺跡である（高木・渡辺1990、高木1997・2002）。馬門石製石棺は継体大王陵とされる今城塚古墳（大阪府高槻市）をはじめ、中国・近畿地方の有力古墳の埋葬施設としてこれまで15基の石棺が確認されている（高木2003）。このことは、ヤマト政権と宇土半島基部勢力との間に密接な繋がりがあったことを示しており、馬門石製石棺が長距離輸送された政治・社会背景を明らかにするうえで、その生産地である石切場は計り知れない情報を内包しているといえよう。

初年度に実施した分布調査によって、これまで明確ではなかった石切場の地質分布や、石切遺構の概略を把握することができた。また、高木氏が古墳時代の石切場と想定していた独立丘北側の発掘調査で、古墳時代から近世までの遺物が出土し、ピット群や掘立柱建物跡などの遺構を検出した。

なかでも特筆すべきは、５世紀中頃から後半の土師器甕やＴＫ209～217型式期の須恵器杯身が出土したことであろう。出土した層は新しい時代の遺物が全く混ざらないことから、古墳時代中・後期の包含層である可能性が高い。これまで表採を含めても古墳時代に属する遺物の出土は皆無であり、極めて重要な成果といえよう。

今後、石切場の実態をより明らかにするうえで馬門石製品の分布調査や石切遺構の詳細な分類・矢穴跡の型式学的検討と年代的位置付けなどの考古学的検討、聞き取りなどの民俗調査、古文書調査、石垣や眼鏡橋など土木構築物の調査、地質調査など学際的な調査が不可欠である（藤本2004）。

さらに、列島各地に分布する石切場跡の研究を進め、これらを総合的に把握し、技術体系としての石材加工技術の変遷と系譜を明らかにしていかなければならない。残された課題は山積しているが、その実態を解明する試みを着実に進めることが肝要であろう。

【参考・引用文献】

高木恭二・渡辺一徳　1990「石棺研究への一提言―阿蘇石の誤認とピンク石石棺の系譜―」『古代文化』第42巻第１号

高木恭二　1997前掲書

池田朋生　2002前掲書

高木恭二　2002「馬門石切場跡」『新宇土市史』資料編第2巻　宇土市

高木恭二　2003「特色ある石棺の文化」『新宇土市史』通史編第１巻　宇土市

藤本貴仁　2004前掲書

報告書抄録

ふりがな	とどろきかいづか・まかどいしいしきりばあと
書　　名	轟貝塚・馬門石石切場跡
副書名	宇土市内遺跡範囲確認調査概報
シリーズ名	宇土市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ号	第27集
執筆者名	藤本貴仁
編集機関	宇土市教育委員会
所 在 地	〒869-0433　熊本県宇土市新小路町95
発行年月日	2005年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北　緯	東　経	調査次数	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
轟　貝　塚 馬門石石切場跡	宮庄町108-1, 120-1, 123-1･2 網津町3482	43211 43211		32° 40′ 33″ 32° 41′ 03″	130° 38′ 35″ 130° 35′ 43″	8次 1・2次	22㎡ 215㎡	範囲確認 〃

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
轟　貝　塚 馬門石石切場跡	貝　塚 生産遺跡	縄文時代・中世 古墳時代・中近世	土坑・溝 掘立柱建物跡	縄文土器・土師器・中世土器 土師器・須恵器・近世陶磁器	古墳時代の土師器・須恵器が出土

轟貝塚・馬門石石切場跡

—宇土市内遺跡範囲確認調査概報—

宇土市埋蔵文化財調査報告書　第27集

発行年月日　2005年３月31日

編集・発行　熊本県宇土市教育委員会

〒869-0433　宇土市新小路町95

TEL0964-22-6500㈹　FAX 0964-58-1005

印　　刷　コロニー印刷

〒860-0051　熊本市二本木３丁目12-37

TEL096-353-1291㈹　FAX096-353-1294